

目 次

はじめに
梵鐘・喚鐘について
用語解説

[A地区]

菩提寺喚鐘	2
即得寺喚鐘	3
旧東光院喚鐘	4
瑞専寺喚鐘	5
大龍禅寺喚鐘	7
大龍禅寺不動院喚鐘	8
稱揚寺喚鐘	9
西称揚寺喚鐘	10
千手寺喚鐘	10
旧芝小学校喚鐘	12
光養寺喚鐘	13
観音寺喚鐘	14
善林寺喚鐘	15
東消防署額田出張所半鐘	15
慈光寺梵鐘	16
慈光寺喚鐘	19
[B地区]	
正光寺喚鐘	24
法流寺喚鐘	25
往生院喚鐘	27
西教寺喚鐘	29
醍醐寺喚鐘	30
大善寺喚鐘	31

[C地区]

清證寺喚鐘	33
横枕寺喚鐘	34
聞称寺喚鐘	34
西福寺喚鐘	35
西光寺喚鐘	36
佛名寺喚鐘	37
専念寺喚鐘	39
旧恵光菴喚鐘	39

[D地区]

善福寺喚鐘	42
西昌寺喚鐘	43
安楽寺喚鐘	44
正福寺喚鐘	45
光教寺喚鐘	45
教岸寺喚鐘	46
淨休寺喚鐘	47
専正寺喚鐘	48
長壽寺喚鐘	49
蓮城寺喚鐘	50
明德寺喚鐘	51
極楽寺喚鐘	52

[E地区]

観音禅寺梵鐘	54
存空寺喚鐘	58
正行寺喚鐘	60
恩教寺喚鐘	61
圓通寺喚鐘	63
稱光寺喚鐘	64

[F地区]

淨光寺喚鐘	66
-------	----

蓮信寺喚鐘	67
念通寺喚鐘	68
念正寺喚鐘	69
本光寺喚鐘	70
寶樹寺喚鐘	71
大通寺喚鐘	72
念佛寺喚鐘	73
西樂寺喚鐘	74
法觀寺喚鐘	75
一乗寺喚鐘	77
観音寺喚鐘	78
乗蓮寺喚鐘	79
淨雲寺喚鐘	80
旧布施市の梵鐘(ユトリート東大阪)	81
勝光寺喚鐘	82
[G地区]	
旧阿弥陀院喚鐘	84
真行寺喚鐘	85
安養寺喚鐘	86
常福寺喚鐘	87
長覚寺喚鐘	88
光泉寺喚鐘	89
佚亡鐘－なくなった鐘－	90
東大阪市内の梵鐘・喚鐘	108
偈頌について	114
東大阪市梵鐘調査一覧表	117
東大阪市喚鐘調査一覧表	119

おわりに

梵鐘・喚鐘について

仏教寺院で時を知らせるために打つ大形の鐘を梵鐘^{ぼんしゅう}といい、鐘楼^{しょうろう}ほかに吊るところから釣鐘^{つりがね}とも呼ばれます。梵は神聖・清浄を意味します。比較的小型のもの(口径55～75cm)は別に喚鐘^{かんしゅう}や半鐘^{はんしゅう}と呼ばれ、堂内や軒下に吊るされ法会の開始を告げます。火事の時に火の見櫓^{やぐら}の上で打ち鳴らされていたのもこの半鐘です。

各部分の名称は図に示したとおりです。一番上につく釣り手の部分を竜頭^{りゅうづ}といいます。竜頭は下向きの双竜^{そうりゅう}が逆向きにつながってアーチ形になるもので、頂上^{かみんほうじゅ}に火焰宝珠^{くわえんぼうじゅ}をおく形を原則とします。竜頭のつく天井部分を笠形^{かさがた}、梵鐘本体部分を鐘身^{しょうしん}と呼びます。鐘身は横方向の上帯・中帯・下帯と、縦方向の縦帯^{じゅうたい}によって区画されます。上・下帯は文様帯となることが多く、とくに鎌倉時代以降は上帯を飛雲文^{ひぐもん}、下帯を唐草文^{からくさもん}で飾るのが一般的です。縦帯のうち2本は竜頭の双竜を連ねた延長線におきます。上帯に接するように乳の間が設けられ、乳が配されます。乳は各区4段4列のものが多くみられます。乳の間^{にゅう}の下を池の間^{いけ}といい、銘文を入れる例が多く、飛天・蓮華・梵字(種子)を配するものもあります。身の下半の中帯と縦帯の交点のうち、直径方向の相対する2箇所に撞木^{つぎ}で突き鳴らす撞座^{つぎざ}を配するのを原則とします。普通は浮き彫り表現の蓮華文からなり、8弁が多いですが4～16弁のものもあります。古くは上に寄り、新しくなると下る傾向があります。中帯とした帯に挟まれた細長い区画を草の間と呼びます。室町時代以降しばしば唐草文を配し、そこから草の間と呼ぶようになります。鐘身の下端は厚みを増して駒の爪^{こまづめ}と称されます。製作地によって中国鐘・朝鮮鐘・和鐘(日本鐘)に分けられます。

朝鮮鐘の特徴としては竜頭が単竜で、その頸を半環状に曲げて懸吊^{けんちよう}の役目をし、かつその両前肢を備えていること。竜頭の背面笠形^{かさがた}と呼ばれる円筒形があること。鐘身に袈裟襷^{けさだすき}がなく区画は一切されず鐘身の上下端に装飾帯が一周し、鐘身下部には飛天・仏・菩薩などの文様を入れることなど和鐘と大きく異なります。東大阪市内で朝鮮鐘と呼んでいるものは和鐘に朝鮮鐘の要素を加味した和